

次なる一手 その5

来年度は文化祭の年です。第49回高月祭が開催されます。令和4年度には、高月祭が50回を迎えるのですね。令和4年度という年が、大きな転換期を迎えるのもうなずけます。

令和4年度入学生から、高等学校は新教育課程になるのです。新しい教科科目や主体的・対話的で深い学びを実践する教育方法が展開することでしょう。さらには、平成4年度入学生が大学受験を迎えるときに、英語4技能試験が具現化されます。大学共通テストの全容も明らかになり、この学校の単位制が開始されると思います。ですから、大きな転換点になることは間違いないことです。

あと二年後のことですが、今の時代は急激に変化していくことを求められる時代であるので、その中でも、温故知新の姿勢の基づき、不易と流行とをきちんと判別しながら、この学校を構築していく必要があると考えます。

そんな時代に向けて、学校としての進むべき道を探りながら、文化祭のテーマや主題を決定していってくれたらこの上ないとも考えます。ぜひ、学生諸君がこの学校の未来について議論し、行くべき道を模索しつつその方向を明確にして光を当ててくれたらと心から願います。

過去においても、昭和から平成への大きな転換期や、創立百年を迎えての発展期とともに、ミレニアムからの男女共学に伴う世代交代期となり、その後の少子高齢化の社会における磐城高校模索時代等を経て、今に至ってきた区切り区切りに、生徒たちが投げかける考察や積極的な弁証法的態度が、まさしく磐城高校が磐城高校であり続けた印ではないかとも思われます。

時代を先取りし、時代の寵児を育む学校であり続けてほしいと心から願います。その学校に見合う地域の子供たちは、まさしく成長を遂げていると感じます。

毎朝、学校からいわき駅まで歩き、生徒とともに学校に上がってくると、平一中の生徒や平一小の児童たちとあいさつを交わすと、この地域の人々のつながりの中に磐城高校が存在することを確信します。今回の野球の甲子園出場についても、市川パンのおかみさんや、佐藤パンのおかみさん、佐々木の奥さんの顔がほころんでいるのを見ると、まさにこの中で自分もはぐくまれてきたことを確信します。

温故知新、不易と流行、不撓不屈の精神を生かしながら、進化し続ける磐城高校であるために、常に自己点検とイノベーションを試みながら、学校運営にあたることができると考えます。それが、磐城高校のあるべき姿であると確信します。